



**Data**

監督・脚本: クリント・イーストウッド

出演: クリント・イーストウッド / ブラッドリー・クーパー / ローレンス・フィッシュバーン / マイケル・ペーニャ / ダイアン・ウィースト / アンディ・ガルシア / イグナシオ・セリッチオ / アリソン・イーストウッド / タイッサ・ファーマー

## 👁️👁️ みどころ

いいネタさえあれば、87歳でも主演・監督が可能。それをクリント・イーストウッドが本作で証明！そのネタは、ニューヨークタイムズ別冊に載った90歳の運び屋“タタじいさん”の実話だ。

『グリーンブック』は黒人差別の強い南部へのロードムービーだったが、大量のドラッグを友とした“運び屋”の旅は膨大な距離。もっとも、1度運べば報酬は1000万円単位だから、1度やれば2度、3度と……。しかし、彼の犯罪の動機は？ 犯罪の認識は？ 逮捕に至るまでの攻防戦は？

“仕事人間”は世の中に多いが、“アールじいさん”は仕事のために娘の結婚式をスッぽかすほどだからひどい。したがって、必然的に妻子とは絶縁状態に。DEA（麻薬取締局）の捜査を巧妙に切り抜けていたが、最後には遂にアウト！そこで、焦点は彼の収支（帳尻）だが、さてカネの帳尻は？ 人生の帳尻は？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■あれから10年！87歳で主演・監督の快挙に拍手！■□■

クリント・イーストウッドは1930年5月31日生まれだから、もうすぐ89歳。本作に主演し、監督したのは87歳の時だというから、恐れ入る。彼が最後に主演したのは『グラン・トリノ』（08年）だから、10年前だ。その時も78歳の頑固な老人役で主演したが、同作で頑固老人が見せた“あつと驚く結末”は特筆モノだった（『シネマ23』48頁）。1960年代の若き日の彼が主演したマカロニ・ウエスタン3部作である『荒野の用心棒』（64年）、『夕陽のガンマン』（65年）、『続・夕陽のガンマン／地獄の決闘』（66年）での

カッコいいガンマンぶりをよく覚えている私には、なるほど、これが78歳の老人役としてアピールしたかったことなのか、とビックリさせられたものだ。

2018年9月15日に75歳で亡くなった女優、樹木希林は全身ガンを患っており、「もうすぐ死ぬ、もうすぐ死ぬ」と言いながら、次々と映画出演を続けていたから、自ら「死ぬ、死ぬ、詐欺」と半分冗談、半分本気で語っていた。そんな“嘘つき”の点では、イーストウッドも同じだ。つまり、『グラン・トリノ』の時に、一時は俳優引退をほのめかしていたのに、なぜ彼は本作でまた主演したの？ちなみに、パンフレットの「INTERVIEW」では「私はいつも辞める辞めると言い続けてるんだ。そんなに正直な人間じゃないと証明したくてね(笑)」と語っている。その理由は次に考えるとして、まずは、その快挙に拍手！

## ■□■いいネタさえあれば！すると、この実話は？■□■

映画は脚本が勝負だが、いい脚本を書くにはいいネタが必要。しかして、一時引退をほのめかしていたイーストウッドの心を動かしたのは、2014年にニューヨークタイムズ紙の別冊「ニューヨークタイムズ・マガジン」に掲載され、全米を驚愕させた「The Sinaloa Cartel's 90-Year-Old Drug Mule (シナロア・カルテルの90歳の運び屋)」という仰天記事だ。その記事は、本作パンフレットの末尾に9頁にわたって全文が掲載されているので、これは必読！

2011年にメキシコ最大の犯罪組織によるメキシコからデトロイトへの麻薬密輸が摘発されたが、そこで大量のコカインを運んでいたのは、87歳、史上最年長となる“運び屋タタ(じいさん)”だったらしい。そこで、これは同年代の俺が主演するのにピッタリのネタだ！イーストウッドはそう判断したわけだが、私が思うに、原案の主人公“タタじいさん”は、読めば読むほど、仕事中心人間で女好き、遊び好きというから実在するイーストウッドじいさんにそっくり！？

## ■□■“タタじいさん”は俺にそっくり！？この主役なら！■□■

『Ray/レイ』(04年)『シネマ7』149頁)を観れば、73歳で亡くなった黒人歌手、レイ・チャーズの一生は女性問題、ヤク問題、所属会社問題等々波乱に満ちたものだったが、最後には12人の子供と21人の孫、5人の曾孫に恵まれたそう。それと同じように、イーストウッドも決してよ良き家庭人ではなく、正式な婚姻は2回、同棲は2回、短い交際は数知れず。いままでに(少なくとも)8人の子供を5人の違う女性たちとの間にもうけているというから、すごい。本来ならそんな経歴は公にできないダブーのはずだが、87歳にもなればもはや怖いものは何もなし！？

その真面目な仕事ぶり(?)でカルテルのボス、ラトン(アンディ・ガルシア)に気に入られ、彼の住む巨大な豪邸に招待されたアールは、クレー射撃やパーティを楽しむだけ

でなく、夜には「ちゃんとサービスしろよ」と言い含められた美女としっかり一夜を共にしていたからすごい。私も1人だけアールのように“あの方面”に元氣な老人を知っているが、翌朝のアールのご満悦そうな顔をみれば、この男はトコトン家庭には向いていない男であることが明白だ。

美しさが命の女優は、老人になればいい役が少なくなるのは仕方がない。岸田今日子の『砂の女』(64年)や浅丘ルリ子や草笛光子らが共演した『デンデラ』(11年)、『シネマ27』187頁)等はその例外だ。男優は女優ほど年齢の制約は少ないが、それでもいい役は少なくなるもので、山崎努や宇津井健、谷啓らが共演した『死に花』(04年)、『シネマ4』338頁)や中国映画の『グォさんの仮装大賞』(12年)、『シネマ34』312頁)はその例外だ。仲代達矢や山崎努のような名優でも、近時の『春との旅』(10年)、『シネマ25』140頁)や『モリのいる場所』(17年)、『シネマ42』未掲載)は名作とは言えないだろう。しかし、本作の原作となった“タタじいさん”は、年齢といい私生活といい、また頑固さや運び屋としての有能さといい、まさに87歳の名優クリント・イーストウッドが演じるにピッタリのネタ(主人公)だ。

## ■□■運び屋の動機は？犯罪の認識は？報酬は？■□■

近時の邦画は説明の長さにうんざりさせられるものが多いが、イーストウッド映画はどれも場面転換のスピード感が心地よい。冒頭、朝鮮戦争の退役軍人である87歳の老人アール・ストーン(クリント・イーストウッド)が自らの農場で1日だけ開花するユリであるデイリリーを栽培し、品評会で優勝するシークエンスが登場する。そこでのアールはいかにも楽しそうかつ得意気だが、そうかといって、娘アイリス(アリソン・イーストウッド)の結婚式に欠席するのは如何なもの……。また、いくらインターネットが嫌いだとしても、時代の流れがあるのだから、ある程度それについていかなければ……。

そんな昔気質の頑固じじいの生き方を貫いたままで死んでしまえばそれでいいのだが、アールはすでに離婚していた妻のメアリー(ダイアン・ウィースト)や娘のアイリスたちを深く失望させたばかりでなく、インターネットでの通信販売普及の煽りを受けて、デイリリーの売り上げは激減。自宅も農園も差し押さえられてしまったから、お手上げだ。ちなみに、今年70歳になった私の同級生たちは概ね退職後の“第二の人生設計”に成功し、それなりに余生を楽しみながら生きているが、約1、2名は本作の導入部に見るアールのような友人も……。

ある日、そんなアールに声をかけてきたのは、トラック運転が達者で、スピード違反等何の違反もないことを誇っているアールの“運び屋”としての能力に目を付けたいかがわしそうな男たちだ。メキシコ国境近くの町、テキサス州エルパソにある、指定されたタイヤ屋を訪れたアールは、見るからに堅気でない男たちから、荷物と連絡用の携帯電話を渡された。長距離を運転し、指定の場所に荷物を運ぶだけで、多額の報酬をもらえるとのこ

とだが、さあアールはこれを引き受けるの？また、見るからにヤバそうな仕事だが、アールの犯罪の認識は？

## ■報酬は？使い道は？2回目以降もやるの？■

アールはビジネスに関しては実直な男だから、「荷物の中身は見るなよ」と言われると、それをちゃんと守っていた。「見るな」と言われると余計見たくなくなるのが人情だから、この点、頑固じじいアールは立派なものだ。仕事を終えた後、封筒に入った札束を見て、アールは「こりゃたまげた！」と言っていたが、さて、そこにはいくら入っていたの？

本作ではそれを教えてくれないから、その後の金の使い具合から金額を推測するしかないが、アールはその報酬で①孫娘ジニー（タイッサ・ファームガ）の結婚式を援助し、②長年使い古したトラックをリンカーンの新車に買い替えていたから、日本円でいえば数百万から1000万円・・・？一度そんなおいしい目をする、凡人は一度だけでは止められないもので、その最たるアールは当然のように2度目に着手。そこでもらった報酬では①差し押さえられた農園を取り戻した上、②自らが所属する退役軍人会に2万5000ドル（約250万円）もの大金を寄付していたから、やっぱり2回目の報酬も概ね1000万円くらいだろう。

麻薬（ドラッグ）の末端販売価格がいくらかは知らないが、チラシには「一度に13億円相当のドラッグを運んだ」と書いてある。そして、パンフレットには報酬は1kg当たり1000ドル（10万円）で、アールは1度に100kg以上のブツを運んでいたらしい。従って、仮に200kg運ぶと、1回の報酬は2000万円になる。しかして、芝山幹郎（評論家）の「イーストウッドの署名と突然の深み」と題する「REVIEW」では、「コカイン1キロを運ぶ手数料が1000ドルとすると、アールは通算でおよそ100万ドルの大金を稼ぎ出していた計算になる。」と書かれているから、ここまでわかると、弁護士の私としても、なるほど、なるほど・・・。しかして、アールは何度運び屋をしたの？そして、何度目で捕まったの？

## ■DEA捜査班の捜査網は？このじいさんは盲点に？■

アメリカのDEA（麻薬取締局）がどんな組織体制になっているのかは知らないが、本作では、その主任特別捜査官（ローレンス・フィッシュバーン）の叱咤激励を受けて、現場のコリン・ベイツ捜査官（ブラッドリー・クーパー）とトレビノ捜査官（マイケル・ペーニャ）がラトン率いるカルテルの摘発のため懸命の捜査を続けるので、それにも注目！

コリン・ベイツ捜査官役のブラッドリー・クーパーは『アメリカン・スナイパー』（14年）で主演したビッグネーム（『シネマ 35』24頁）だが、全編で2時間という基本方針を守ったイーストウッド映画の本作では、当然、出番が制約されることになる。これは、ラトン役を演じたビッグネーム、アンディ・ガルシアも同じで、そのボスとしての存在感は

圧倒的だったが、出来の悪い部下フリオ（イグナシオ・セリッチオ）に殺される時は実にあっけない。ベイツ捜査官は主任特別捜査官の信頼が厚く、相棒のトレビノ捜査官との共同捜査では、うまくカルテル内から内部通報者を見つけ出して、巧妙かつかなり嫌らしい捜査を続けるが、なかなか包囲網が狭められないから、次第に主任特別捜査官のイライラは募ってくることに……。捜査陣にとって、20kgものブツを運ぶ“運び屋”のイメージとして、アールのようなじいさんは到底思い浮かばなかったから、絶好の盲点になったわけだ。

## ■□■男同士の語らいに注目！そこから学ぶものは？■□■

本作はそんな捜査陣とアールとの下派手なカーチェイスはなく、アールが車を走らせるシーンは鼻歌交じりの牧歌的な風景ばかり。また、当然ながらアールと捜査陣との間のアクションを交えた追っかけっこもない。それに代わって本作に登場するのは、ある晩のモーターでのアールとベイツ捜査官との“ちょっとした語らい”と、翌朝のダイナズでの2人の意外に相性が良さそうな“心の語らい”だ。

人間、87歳にもなれば会話術が巧みになり、誰とでも率直に本題に入った会話ができるもの。本作のアールを見ていると、ホントにそう思ってしまう。そのため、朝のダイナズのカウンターで、昨晚に続いて再会した2人が朝の挨拶を交わしたのは当然だが、そこで語られる数分間の“男の人生論”は興味深い。アールは仕事人間で家庭を顧みなかったことを今は反省しているが、それはベイツ捜査官だって同じこと。そんなベイツ捜査官の実情がアールにはすぐにわかったようで、その場で彼がベイツ捜査官に伝えたちょっとしたアドバイスとは……？

もちろん、最後にアールはベイツ捜査官の手で逮捕されるわけだが、互いの人間性をごく短い時間の中で見せ合っただけのシークエンスがあるからこそ、ラストの逮捕劇の意味はより深まることに。

## ■□■アールの人生の収支（帳尻）は？何を失い何を得たの？■□■

第91回アカデミー賞で、作品賞を含む3部門を受賞した『グリーンブック』（18年）は用心棒から運転手になったイタリア系移民の白人と天才ピアニストの黒人が織り成すロードムービーだったが、その旅先は黒人差別が根強い南部だった。それに対して、同じロードムービーの本作は、荷台に積んだ大量のドラッグをお供にした87歳のアールの一人旅だ。また、その旅はメキシコ国境からアリゾナ州のアジトを経由してデトロイトへ至る膨大な距離だ。そんな旅の中で得た、アールの収支（帳尻）は……？

前述した「シナロア・カルテルの90歳の運び屋」によると、歴史上の事実として、87歳の“運び屋”となったタタじいさんは、裁判では「強制的に運び屋をやらされた」等と弁解したものの、懲役20年を求刑され、結局懲役3年を宣告されたらしい。もともと、

彼はこの判決前に「もし刑務所に入らなくていいのなら、50万ドルのペナルティをハワイアンパパイアで支払う。」と不思議な答弁をしたが、判事はこの条件を呑まなかったそうだ。これを読むと、タタじいさんはかなり“イヤな奴”だが、イーストウッドが描く本作ではアールの法廷での姿は実に潔いものだから、それに注目！

ちなみに、去る3月6日に10億円の保釈保証金を全て納付して約100日ぶりに保釈された日産元会長のカルロス・ゴーン被告は、今後とことん無罪を争うはずだが、アールは弁護士があっけにとられるほど簡単に自分は有罪だと認めてしまっていたから、アレレ……。これでは本作は法廷モノとしては全然成り立たないが、その分、“人間モノ”としてはより深みを増してくることになるからそれに注目！しかして、87歳の運び屋アールの人生の収支（帳尻）は？

彼は、十数回の運び屋稼業をやる中で、2010年にはトータルで100万ドル（約1億円）以上を稼いだが、その間家族との縁はますます薄くなってしまったから、彼の人生の収支のプラスマイナスは、むしろマイナス……。さらに、2、3回でやめていけばよかったのだが、結局捕まってしまったのはやっぱりドジ。しかし、捕まったことによって、逆に家族との絆をかなり取り戻したから、彼の人生のプラスマイナスはむしろプラス……。タタじいさんへの3年の刑は執行され、彼は92歳で死亡したが、本作ではアールの刑がどれだけ執行され、アールが余生をどう生きたのかも全く教えてくれない。そのため、それについては各自しっかり考えたい。

2019（平成31）年3月14日記